

酒井根に縁のある 太田道灌 エピソード

みのひとつだになきぞかなしき 山吹伝説

太田道灌は室町幕府の重臣である扇谷上杉氏の家宰です。永享4年(1432)に相模で生まれました。幼名は鶴千代、元服して資長と名乗り、道灌は剃髪後の名です。

ある日、道灌は鷹狩りに出かけ、俄雨にあつてしまい、道端のみすばらしい家に駆け込みました。

道灌が「急な雨にあつてしまった。養を貸してもらえぬか。」と声をかけると、思ひもよらず年端もいかぬ少女が出てきて、養ではなく山吹の花一輪を黙って差し出しました。花の意味がわからぬ道灌は「花が欲しいのではない。」と怒り、雨の中を帰って行ったのでした。



その夜、道灌がこのことを近臣に語ると、「後拾遺集に醍醐天皇の皇子・中務卿兼明親王が詠まれたものに【七重八重花は咲けども山吹の(実)みのひとつだになきぞかなしき】という歌があります。その娘は、養ひとつなき貧しさを山吹に例えたのではないのでしょうか。」と言いました。

道灌は驚き己の不明を恥じ、この日を境に歌道にも精進するようになったと言われています。

文明十年(1478)十二月十日は、太田道灌と千葉孝胤(ちばのりたね・生涯年不詳)が酒井根原で戦ったと言われている日です。

戦場となった酒井根(さかいね)一帯には現在住宅地が広がり、旧日本住宅公団が手がけた日本初的大型団地「光ヶ丘団地」のモダンな集合住宅も、その一角に立ち並んでいます。

今となつては、この地が激しい戦いの舞台となったことを偲ぶことはできませんが、団地内公園広場の南東端に、「首塚・胴塚」と呼ばれる二基の塚が残っています。

